

学生の自己肯定感の向上に関する研究  
— A学部における悉皆調査の結果より —

宮嶋 淳 名倉 弘美 山下 科子  
大藪 元康 早川 潤一

Study to clarify Current Situation and Problem on Student's Self-esteem  
— Results of Investigation for all Students Belonging to A Department —

Jun Miyajima Hiromi Nagura Shinako Yamashita  
Ooyabu Motoyasu Junichi Hayakawa

人間福祉学会誌 第17巻第2号 別刷 (2017年12月)

*Reprinted* from THE JOURNAL  
OF HUMAN WELL-BEING  
Vol.17 No.2 : 31~39 (December 2017)  
SEKI, GIFU, JAPAN

# 学生の自己肯定感の向上に関する研究

## — A学部における悉皆調査の結果より —

### Study to clarify Current Situation and Problem on Student's Self-esteem — Results of Investigation for all Students Belonging to A Department —

宮嶋 淳\*      名倉 弘美\*      山下 科子\*  
Jun Miyajima    Hiromi Nagura    Shinako Yamashita

大藪 元康\*      早川 潤一\*  
Motoyasu Ooyabu    Junichi Hayakawa

抄録：本研究では、福祉系大学A学部の学生の自己肯定感と日常生活における活動の現状を把握し、学生たちが「夢を描き、一步を踏み出せる」素養を養成するため、如何なる教育的配慮が必要なのか、その課題を明らかにする。

そのため本研究では、先行研究レビューの結果を踏まえ、高儀ら（2015）が行った調査研究のデザインを参照し、近藤（2013）の尺度を用いて、A学部の学生の自尊感情と生活体験についての研究をデザインした。

得られた結論。A学部の学生は、社会的自尊感情並びに基本的自尊感情の両方が高いタイプの学生とその真逆の学生に二分されていた。したがって、両タイプの学生の特性を活かした、A学部における学習面や社会活動への参画の動機付けや継続の必要性、さらにはより高所を目標とする意欲を引き出すような教育的配慮が必要であると考えられる。

**Abstract** : We got a grasp of the current situation regarding student self-esteem and life experience through a questionnaire survey. We thought about what kind of education would be necessary to train student dreams and advance their abilities. We reviewed related past research and utilized Takagi's (2015) research design. In addition, we used the scale Kondo (2013) created.

Students were divided into "high-level students" and "other students" with regard to social self-esteem and basic self-esteem. Therefore, what we have to do is to utilize the characteristics of both types of students and to support learning and social activities as well as high goals. That is educational care that we should do.

キーワード：自己肯定感、生活体験、教育、アンケート調査

Keywords : Self-esteem, Life experience, Education, Questionnaire survey

## I. 緒言

内閣府<sup>1)</sup>の2014(平成26)年版『子ども・若者白書』内での、国際比較調査の結果をみると、日本の若者は他国の若者に比べて自己肯定感が極端に低く、将来に対して明るい希望を持っていないことが報告されている。近年の教育改革の議論でも日本の若者の自己肯定感の低さは、現在の学校教育の大きな問題点として挙げられている。また、国立青少年教育振興機構(2017)<sup>2)</sup>は「社会を生き抜く資質・能力」として、「意欲」「コミュニケーション力」「自己肯定感」「へこたれない力」をあげている。

大学における学びのペース・ラインには、自己に対す

る肯定的な評価がある。自己を肯定的に評価できる「自己肯定感」は、大学での学びや就職に向けての活動等において、深く関連する自己認識の一つである。肯定的な自己認識、すなわち、自尊心が高いことが社会で生き抜くために重要であると考えられている。

わが国全体に広がる「あきらめ・ムリ・一步を踏み出さない」という学生の課題は、A学部の学生においても共通するのではないか。また、この背景に「経験知のなさ」や「自己肯定感の低さ」があるのではないだろうか。これが本研究の仮説である。

本研究では、A学部の学生の自己肯定感と日常生活における活動の現状を把握し、学生たちが「夢を描き、一

\* 中部学院大学 人間福祉学部

歩を踏み出せる」素養を養成するため、如何なる教育的配慮が必要なのか、その課題を明らかにする。

## II. 文献検討

### 1. 教育における「経験」の意味

中央教育審議会 (2012)<sup>3)</sup>の報告によると日本の子供たちの自己肯定感は諸外国に比べ低い状況にある。それを踏まえて「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び (アクティブ・ラーニング)」が推奨されている。

中原・溝上 (2014)<sup>4)</sup>は、全国大学生生活協同組合連合会が実施している『学生の消費生活に関する実態調査』<sup>5)</sup>の結果から「大学生生活の重点」を再分析し、「勉強第一」群より、「豊かな人間関係」を重視する群の方が、高い自己肯定感を持っていることを指摘した。保田・溝上 (2014)、杉浦ら (2016)、館野 (2016)<sup>6-8)</sup>も「大学の授業内外の主体的な実践」は、「豊かな人間関係」に影響し、その経験が大学生生活の充実につながっていると報告した。つまり、大学における主体的な学びが、自己肯定感を高め、豊かな人間関係の構築や大学生生活の充実につながることを示唆している。

次に、大学と社会を繋ぐ役割を果たしているインターンシップについて先行研究を概観する。河野 (2011)<sup>9)</sup>は、文系学生のインターンシップが大学での学びに与える効果についての調査を行った。その結果、学生が「力を知る・確かめる (大学で学んだことを実践の場で確認したい)」という意識を持ってインターンシップに臨むことにより、インターンシップの効果が高まることを明らかにした。インターンシップ経験で学生は「力を知る」「力 (が身についているか) を確かめる」「力を高める」の3つの役割を洞察する傾向があることが示された。

### 2. 学生の自己肯定感と生活体験

自己肯定感と生活習慣を関連づけた研究として樋口・松浦 (2003)<sup>10)</sup>は、大学生の自己肯定感は生活習慣と関連があると報告している。樋口・松浦による質問紙調査の結果では、好ましい生活習慣を守っている者ほど、自己肯定感が高い傾向にあった。

中央教育審議会 (2007)<sup>11)</sup>は、青少年の慢性的な疲労感の増加、あきらめの速さ、耐性の欠如、体力の低下等が、彼らの自己肯定感の低さにつながっていると指摘する。東京都教職員研修センター (2009)<sup>12)</sup>は、学校生活に満足している人は、自己肯定感が高いとも報告している。また河越ら (2014)<sup>13)</sup>は、「大学生の自己肯定感」が「充実感、主張、意欲、個性」の4因子に分けられるという結論を導いた。これら4因子は全て「学校生活」から影響を受ける。つまり学校生活の中で、周囲の者から注目されるような経験や勉強、運動や特技などで認められる経験が自己肯定感を高めることに繋がるとされるのである。

学校生活の満足度と関連する研究として、平岩 (1990)、

石丸ら (2005)、青戸 (2012)、吉原 (2016)<sup>14-17)</sup>は、児童期や思春期の自己肯定感に影響を及ぼす要因として学校生活への適合を取り上げた。学校生活に適合する人は、友人や教師からの評価が高く、自己肯定感が高くなる。生活体験との関連で日景 (2012)<sup>18)</sup>は、①生活技能が高い人は自己肯定感が高いこと、②知識が高い生徒は技能程度も高いことを示した。荒谷 (2013)<sup>19)</sup>は、大学生に「人生で自分の成長を感じた肯定的場面」を質問した。その結果、大学生の自己成長は「仲間との一体感」と関連していた。上記の先行研究から大学生の自己肯定感は、自身の生活 [習慣・体験・満足] と関連しあっており、自身が①主体的に実践し、②豊かな人間関係が構築されることで、③自己肯定感が高まることを示唆された。また、宮嶋 (2008)<sup>20)</sup>は社会福祉系学生に焦点をあて、学生の生活体験・学習活動と生活実態に関する量的調査を行い、社会福祉系学生の支援の課題が多岐にわたることを示唆している。

## III. 研究の目的と意義

この研究ではまず、東海地区に位置するある大学のA学部に2016年度在籍している全学生の「自己肯定感」と「生活状況」を把握することをめざした。同学部に所属する学生の自己肯定感や生活状況を把握することは、上記で認められるように効果的な教育的配慮の焦点を明らかにすることにつながる。学生を理解し、効果的な教育的配慮の焦点が明らかにされるなら、A学部の掲げるディプロマポリシーへと導く方法や学生へのアプローチの留意点を発見することができるだろう。本研究で、学生の自己肯定感を向上させるための焦点や示唆を得ることは、A学部でよりよい学生のニーズに即した教育改革を行うためのエビデンスとなると考える。

## IV. 研究方法

### 1. 研究デザイン

近藤 (2013)<sup>21)</sup>によれば、自尊感情には①社会的自尊感情 (SOSE: Social Self Esteem) と②基本的自尊感情 (BASE: Basic Self Esteem) の二つの領域がある。これらの領域を明確に分けて測定する尺度として、近藤は「そばセット (SOBA-SET: Social & Basic Self Esteem Test)」を開発している。近藤が開発した SOBA-SET を活用した先行研究として高儀ら (2015)<sup>22)</sup>の研究がある。高儀らは、看護系大学の学生の自尊感情の実態を調査した。その結果から、自尊感情の発達・成長を縦断的に追跡し、教育方法の検討をしていく必要性を論じている。本研究では、先行研究レビューの結果を踏まえ、高儀らが行った調査研究のデザインを参照し、近藤の尺度を用いて、A学部の学生の自尊感情と生活体験についての研究をデザインした。

なお、近藤のSOBA-SETの特徴は、次の通りである。SOBA-SETにより測定できる自尊感情は、4つのパターンで構成される。すなわち、SBタイプは、社会的自尊感情(= social self-esteem; 以下「SOSE」)と基本的自尊感情(= basic self-esteem; 以下「BASE」)が、バランスがよく形成され安定したタイプであり、失敗したり叱られたりする体験があったとしても、自らの力で立ち直ることができるタイプである。第二にsbタイプはSBタイプと正反対を示す。このタイプは「誰の目にも気になる学生」として映るため、学生に対する周囲の協力と働きかけが早期に且つ強力に行われる可能性が大きい。自信なさげな素振り、いつもポツンと一人である(孤立)姿が目立つ。第三にsBタイプはSOSEが育っていないタイプで、マイペース型ののんびり屋に認められる。このタイプはやる気を起こさせるような学習課題を提示する働きかけが必要であり、それによって学生は自信をもつことができ、前に進むことが期待できる。第四のSbタイプは一番要注意とされるタイプと言われる。このタイプはSOSEが肥大化し、表面的には笑顔で誰とも良好な関係を保とうとするが、内面は不安でいっぱいである。感情が不安定で、叱られないように、褒められ続けようと頑張る傾向にあり、周囲も「この子なら大丈夫」と捉えてしまう。

## 2. 調査対象者

本研究の調査対象者は、A学部所属する1～4年生

までの全学生338名である。調査の実施場所はB学内講義室とした。趣旨を説明した後、無記名で即時配布・回収方式で実施した。

## 3. 期間

アンケート調査は2016年12月～2017年4月にかけて、学年毎に一人1回実施した。

## 4. 倫理的配慮

中部学院大学・中部学院大学短期大学部倫理委員会による研究倫理審査(受付番号:E16-0016; 受付日:2016年7月25日)を経て行った。

## 5. データ収集方法及び分析

収集したアンケートによる回答は、Excelに入力し、その後、量的データはIBM SPSS Statistics 23で、自由記述によるテキストデータはIBM SPSS Analytic for Surveys 4.0で、集計並びに分析を行った。分析後のアンケート用紙は、筆者らが厳重に保管している。

## V. 結果及び考察

### 1. 結果

A学部で学ぶ学生は多様であり、青年期以降の成人期にある学生もおり、本研究では青年期に属する年齢の学生、すなわち18歳以上22歳までの学生に着目して、分析を行った。その結果、2016年度に学科に在籍する338名の学生のうち、242名の回答を分析対象とした(表1)。

表1 回答者の内訳

	男性	女性	合計	在学生数
1年生	19 (7.85%)	31 (12.81%)	50 (20.66%)	60 (17.75%)
2年生	25 (10.33%)	25 (10.33%)	50 (20.66%)	80 (23.67%)
3年生	34 (14.05%)	25 (10.33%)	59 (24.38%)	83 (24.56%)
4年生	48 (19.84%)	35 (14.46%)	83 (34.30%)	115 (34.02%)
合計	126 (52.07%)	116 (47.93%)	242 (100.0%)	338 (100.0%)

自己肯定感尺度による調査の集計並びに一元配置分散分析の結果は、表2のとおりである[F(3,238)=2.64, P<0.05]。表2に認められるとおり、18項目中5項目(「3運動は得意なほうだと思う」「8悪いときには、あやまるべきだと思う」「10自分はこのままではいけない、と思う」「11決まりは守るべきだと思う」「13自分には、良いところも悪いところもあると思う」)において、学年間の母平均に差が認められた。抽出された5項目について学年間の差が、どの学年で生じているのかを確かめるため、多重比較(石村・石村:2015)<sup>20)</sup>を行い、表3を得た。なお、5項目のうち、「3運動は得意なほうだと思う」と「13自分には、良いところも悪いところもあると思う」については有意な差が抽出されなかった。

差が認められた3項目について、対応する学年の回答結果を示すと表4のとおりである。

表3と表4より、項目「8」の1年生と4年生の観測値を比較してみると、「とてもそう思う」と「そう思う」を合計した場合、どちらも9割を超える。しかし、1年生においては「とてもそう思う」が42.0%と低く、「そう思う」の割合が高くなっている。項目「10」の3年生と4年生を比較すると、3年生では「全然そう思わない」と現状を肯定する学生の割合が5割を超えていた。また項目「11」をみると、1年生に「とてもそう思う」割合が低く、4年生では高く観測された。

次に高儀らの看護系大学生における調査結果とA学部の学生らを近藤の提唱するSOBA-SETのタイプで比較してみると、表5のようになる。

高儀らは、表5に引用したデータ結果を次のように考察している。

表2 自己肯定感尺度 = SOBA-SET による調査結果

項目	とても そう思う	そう思う	そう 思わない	全然そう 思わない	合計	平均値	標準 偏差	分散	F 値	有意 確率
1 ほとんどの友だちに、好かれていると思う。	20	129	73	18	240	2.36	.757	.573	2.381	.070
2 自然は大切だと思う。	129	102	4	7	242	1.54	.676	.457	2.307	.077
3 運動は得意なほうだと思う。	41	82	65	53	241	2.54	1.015	1.030	<u>3.168</u>	<u>.025</u>
4 自分は生きていていいのだ、と思う。	79	130	24	8	241	1.84	.732	.536	1.551	.202
5 うそをつくことは、いけないことだと思う。	59	138	35	10	242	1.98	.745	.556	.842	.472
6 他の人より、頭が悪いと思う。	11	51	123	57	242	2.93	.791	.626	.730	.535 *
7 他の人より、運動が下手だと思う。	26	82	77	57	242	2.68	.952	.907	1.565	.198 *
8 悪いときには、あやまるべきだと思う。	145	88	6	3	242	1.45	.611	.373	<u>3.419</u>	<u>.018</u>
9 何かで失敗したとき、自分はダメだなどと思う。	10	31	124	77	242	3.11	.776	.603	1.558	.200 *
10 自分はこのままではいけない、と思う。	4	35	117	86	242	3.18	.733	.537	<u>2.961</u>	<u>.033</u> *
11 決まりは守るべきだと思う。	107	119	12	4	242	1.64	.656	.430	<u>3.958</u>	<u>.009</u>
12 友だちが少ないと思う。	28	95	83	36	242	2.52	.884	.782	1.160	.326 *
13 自分には、良いところも悪いところもあると思う。	99	124	14	5	242	1.69	.675	.455	<u>2.732</u>	<u>.044</u>
14 しつけは大切だと思う。	75	149	16	2	242	1.77	.599	.359	2.499	.060
15 ほかの人より、勉強がよくできると思う。	8	38	127	69	242	3.06	.757	.573	1.059	.367
16 とくどき、自分はだめだなどと思う。	8	22	147	65	242	3.11	.694	.481	.696	.555 *
17 健康は大切だと思う。	165	71	4	2	242	1.35	.558	.312	.508	.677
18 生まれてきてよかったと思う。	100	115	20	7	242	1.73	.734	.539	1.226	.301

備考：[F(3,238)=2.64, P<0.05]。表の右端=\*のある項目は、逆転項目。

表3 自己肯定感尺度に関する学年間の差

従属変数	(I) 学年	(J) 学年	平均値の差 ( $\bar{x}_i - \bar{x}_j$ )	標準誤差	有意確率
8 悪いときには、あやまるべきだと思う。	1年生	2年生	.100	.120	.840
		3年生	.250	.116	.137
		4年生	.315	.108	.020
	4年生	1年生	-.315	.108	.020
		2年生	-.215	.108	.194
		3年生	-.065	.102	.922
10 自分はこのままではいけない、と思う。	3年生	1年生	.230	.139	.352
		2年生	.190	.139	.523
		4年生	.366	.123	.017
	4年生	1年生	-.136	.130	.721
		2年生	-.176	.130	.527
		3年生	.366	.123	.017
11 決まりは守るべきだと思う。	1年生	2年生	.120	.129	.788
		3年生	.284	.124	.103
		4年生	.366	.115	.009
	4年生	1年生	-.366	.115	.009
		2年生	-.246	.115	.146
		3年生	-.082	.110	.877

備考：多重比較は Tukey HSD による。

一見心配のない学生が6~7割であったが、自尊感情は流動的であり、何か物事に直面したときには自尊感情の4パターンのどこに変更されていくとも限らない。また、物事を遂行する(行動する)行為

も人によりさまざまである。自己効力感を意識しての行動変容への追求も学生の自尊感情育成に大きく関与すると考える。

表4 多重比較による学年間の差①-自己肯定感-

8 悪いときには、あやまるべきだと思う。	1年生		2年生		3年生		4年生		合計	
とてもそう思う	21	42.0%	28	56.0%	38	64.4%	58	69.9%	145	100.0%
そう思う	27	54.0%	18	36.0%	19	32.2%	24	28.9%	88	100.0%
そう思わない	1	2.0%	3	6.0%	2	3.4%	0	.0%	6	100.0%
全然そう思わない	1	2.0%	1	2.0%	0	.0%	1	1.2%	3	100.0%
合計	50	100.0%	50	100.0%	59	100.0%	83	100.0%	242	100.0%
10 自分はこのままではいけない、と思う。	1年生		2年生		3年生		4年生		合計	
とてもそう思う	1	2.0%	1	2.0%	1	1.7%	1	1.2%	4	100.0%
そう思う	7	14.0%	7	14.0%	6	10.2%	15	18.1%	35	100.0%
そう思わない	25	50.0%	23	46.0%	21	35.6%	48	57.8%	117	100.0%
全然そう思わない	17	34.0%	19	38.0%	31	52.5%	19	22.9%	86	100.0%
合計	50	100.0%	50	100.0%	59	100.0%	83	100.0%	242	100.0%
11 決まりは守るべきだと思う。	1年生		2年生		3年生		4年生		合計	
とてもそう思う	13	26.0%	18	36.0%	30	50.8%	46	55.4%	107	100.0%
そう思う	32	64.0%	29	58.0%	24	40.7%	34	41.0%	119	100.0%
そう思わない	4	8.0%	1	2.0%	5	8.5%	2	2.4%	12	100.0%
全然そう思わない	1	2.0%	2	4.0%	0	.0%	1	1.2%	4	100.0%
合計	50	100.0%	50	100.0%	59	100.0%	83	100.0%	242	100.0%

表5 SOBA-SET による結果の比較

(単位：%)

学年	高儀らの報告校				A学部			
	SB	sb	sB	Sb	SB	sb	sB	Sb
1年生	70.3	4.1	23.0	2.7	78.0	<u>10.0</u>	2.0	<u>10.0</u>
2年生	62.5	0.0	29.2	8.3	82.0	4.0	2.0	<u>12.0</u>
3年生	65.4	7.7	23.1	3.8	84.7	1.7	5.1	8.5
4年生	43.0	10.0	10.0	0.0	68.7	8.4	7.2	<u>15.7</u>

高儀らの報告校と比較して、A学部の学生のタイプは、表5に太字・下線で示したタイプの割合が多い。近藤による解説を再度引用すれば、sbタイプは「誰の目にも気になる学生」であり、学生支援が顕著に必要な学生である可能性が高い。また、Sbタイプは、表面的には笑顔で誰とでも良好な関係を保とうとするが、内面は不安でいっぱいである。感情が不安定で、叱られないように、褒められ続けようと頑張る傾向が心配されている。sbタイプが1割を占める2017年度の2年生は、多くの支援を求めている可能性が高い。また、学年間の平均の差を求めため一元配置分散分析を試みた。分散分析においては、学年ごとの社会的自尊感情(SOSE)と基本的自尊感情(BASE)の二つの領域を比較した。SOSE得点[F値=3.456, P=0.15]、BASE得点[F値=3.748, P=0.12]であり、有意な差が認められた。その後、Tukeyの方法による多重比較を行ったところ、SOSE得点並びにBASE得点において「3年生と4年生」の有意な差が認められた。

学生生活上の現在の状況(設問3)について質問した結果は表6のとおりである。表6の集計結果をもとに、学年ごとの結果の相違を確認するため一元配置分散分析を行った。その結果、有意差のある項目は、項目「1」「3」

「4」「9」「13」及び「15」であった。なお、項目「3」の実習での学びについては、1・2年生の多くが該当しないことから、分析の対象としないこととした。有意な差があると示された項目について、多重比較を行ったところ、表7が得られた。なお、分析の対象とした5項目のうち、「1 高校生の時よりも学習時間が増えた」と「4 大学に来て友達(人間)関係が広がった」については学年間の有意な差が抽出されなかった。

差が認められた3項目について、対応する学年の回答結果を示すと表8のとおりである。

項目「9」については、1年生と4年生、2年生と3年生、2年生と4年生との間で有意な差が観測された。教員と学生との距離(気楽さ)については、少人数教育の機会やゼミナールの構成と関係があるだろう。項目「13」では、1年生でボランティア活動を「よく」している割合がほとんどなかった。入学当初における1年生の「ボランティア」に関する認識が影響しているのではないだろうか。項目「13」では、2年生と4年生に差が認められた。進路決定している4年生と未だ決定時期にはほど遠い2年生との間に差が生じるのは了解しやすい結果であった。

表6 学生生活上の現況

項目	選 択 肢				合計	平均値	標準偏差	分散	F 値	有意確率
	そう思う	どちらかといえばそうだ	そう思わない	全くそう思わない						
1 高校生の時よりも学習時間が増えた。	25(10.3)	54(22.3)	98(40.5)	65(26.9)	242	2.83	.950	.902	3.439	0.018
2 授業にはしっかりと出席している。	121(50.2)	97(40.2)	19( 7.9)	4( 1.7)	241	1.61	.712	.506	1.914	0.128
3 (実習に行った人は) 実習での学びは大きかった。	96(65.8)	31(21.2)	13( 8.9)	6( 4.1)	146	1.04	.980	.961	44.24	0
4 大学に来て友達(人間)関係が広がった。	124(51.4)	85(35.3)	29(12.0)	3( 1.3)	241	1.63	.748	.560	3.035	0.030
5 夢中になれることを見つけた。	89(37.0)	88(36.4)	51(21.1)	14( 5.5)	242	1.95	.908	.824	1.673	0.173
6 充実した大学生活を過ごしている。	95(39.2)	111(46.3)	27(11.2)	9( 3.3)	242	1.78	.777	.603	0.042	0.989
7 大学には自分の居心地のいい場所がある。	96(39.4)	107(44.8)	33(13.7)	5( 2.1)	241	1.78	.763	.583	1.535	0.206
8 大学で昼食を食べる時、誰かと食べることが多い。	168(69.4)	43(17.8)	22( 9.1)	9( 3.7)	242	1.47	.815	.665	0.177	0.912
9 ゼミの先生とは、気楽に話せる。	123(51.0)	80(33.2)	27(11.2)	11( 4.6)	241	1.69	.851	.724	9.438	0
10 サークル・部活などの授業外活動が楽しい。	86(38.2)	78(33.8)	45(18.8)	22( 9.2)	231	1.95	1.026	1.052	2.149	0.095
11 大学以外の社会活動がんばっている。	52(21.6)	62(26.9)	99(41.1)	25(10.4)	238	2.38	.976	.953	1.801	0.148
12 アルバイトをがんばっている。	112(46.5)	80(34.0)	25(10.4)	22( 9.1)	239	1.8	.966	.933	0.712	0.546
13 ボランティア活動をよくしている。	30(12.4)	47(19.4)	96(40.9)	66(27.3)	239	2.79	1.018	1.036	2.775	0.042
14 親やきょうだいなど家族との関係は良い。	121(50.0)	94(38.9)	16( 6.6)	11( 4.5)	242	1.65	.802	.643	1.676	0.173
15 将来のことを具体的にイメージしている。	72(29.8)	89(36.8)	56(23.1)	25(10.3)	242	2.13	.972	.945	3.082	0.028

備考：「選択肢」欄の左側数値=実人数、( )内数値=%。[F(3.238)=2.64, P<0.05]。

表7 学生生活に関する学年間の差

従属変数	(I) 学年	(J) 学年	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率
9 ゼミの先生とは、気楽に話せる。	1 年生	2 年生	-.182	.163	.680
		3 年生	.393	.156	.060
		4 年生	.497*	.146	.004
	2 年生	1 年生	.182	.163	.680
		3 年生	.575*	.156	.002
		4 年生	.678*	.145	.000
	3 年生	1 年生	-.393	.156	.060
		2 年生	.575*	.156	.002
		4 年生	.104	.138	.875
	4 年生	1 年生	.497*	.146	.004
		2 年生	.678*	.145	.000
		3 年生	-.104	.138	.875
13 ボランティア活動をよくしている。	1 年生	2 年生	.140	.201	.899
		3 年生	.209	.194	.701
		4 年生	.486*	.180	.038
	4 年生	1 年生	.486*	.180	.038
		2 年生	-.346	.180	.223
		3 年生	-.276	.171	.374
15 将来のことを具体的にイメージしている。	2 年生	1 年生	.080	.192	.976
		3 年生	.207	.184	.675
		4 年生	.468*	.172	.035
	4 年生	1 年生	-.388	.172	.110
		2 年生	.468*	.172	.035
		3 年生	-.261	.163	.382

表8 多重比較による学年間の差②—学生生活—

9 ゼミの先生とは、気楽に話せる。	1年生		2年生		3年生		4年生		合計	
そう思う	17	34.0%	16	32.0%	37	62.7%	52	62.7%	122	100.0%
どちらかといえばそうだ	22	44.0%	19	38.0%	15	25.4%	24	28.9%	80	100.0%
そう思わない	7	14.0%	9	18.0%	5	8.5%	6	7.2%	27	100.0%
全くそう思わない	3	6.0%	6	12.0%	2	3.4%	0	.0%	11	100.0%
NA	1	2.0%	0	.0%	0	.0%	1	1.2%	2	100.0%
合計	50	100.0%	50	100.0%	59	100.0%	83	100.0%	242	100.0%
13 ボランティア活動をよくしている。	1年生		2年生		3年生		4年生		合計	
そう思う	1	2.0%	8	16.0%	8	13.6%	13	15.7%	30	100.0%
どちらかといえばそうだ	8	16.0%	5	10.0%	11	18.6%	23	27.7%	47	100.0%
そう思わない	21	42.0%	21	42.0%	23	39.0%	31	37.3%	96	100.0%
全くそう思わない	18	36.0%	16	32.0%	17	28.8%	15	18.1%	66	100.0%
NA	2	4.0%	0	.0%	0	.0%	1	1.2%	3	100.0%
合計	50	100.0%	50	100.0%	59	100.0%	83	100.0%	242	100.0%
15 将来のことを具体的にイメージしている。	1年生		2年生		3年生		4年生		合計	
そう思う	12	24.0%	11	22.0%	18	30.5%	31	37.3%	72	100.0%
どちらかといえばそうだ	18	36.0%	18	36.0%	20	33.9%	32	38.6%	88	100.0%
そう思わない	14	28.0%	13	26.0%	15	25.4%	14	16.9%	56	100.0%
全くそう思わない	6	12.0%	8	16.0%	6	10.2%	5	6.0%	25	100.0%
NA	0	.0%	0	.0%	0	.0%	1	1.2%	1	100.0%
合計	50	100.0%	50	100.0%	59	100.0%	83	100.0%	242	100.0%

設問4に関する結果について検討する。A学部に入学したことをどのように思っているのか、また、それはなぜなのかを「良かった」という側面に焦点化して抽出した。その結果を、図1並びに表9に示した。全体として

学生の8割程度が「よかった/まあよかった」と回答している。その一方で「後悔している」という学生が全体で4.9% (17人) おり、1年生の男子で16.7% (3人) と割合が高くなっている。

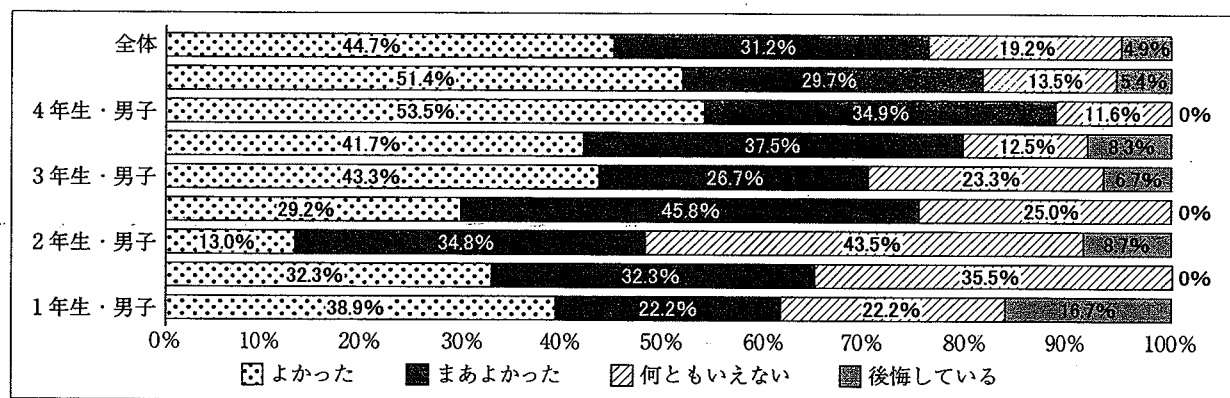


図1 この大学に入学したこと

表9 「この大学に入学したこと」に関する「良かった」理由のカテゴリー

抽出されたカテゴリー	回答数	回答率	カテゴリー修正	修正後回答数	修正後回答率
1 友達	24	36.4	人	40	60.6
2 部活動	16	24.2	活動	16	24.2
3 良好な関係	8	12.1	関係	8	12.1
4 人(良い、大切な)	8	12.1	人		
5 生活(ゆとり、楽な、自由な)	5	7.6	生活	5	7.6
6 仲間	4	6.1	人		
7 学ぶこと	3	4.5	学び	3	4.5
8 4年間	3	4.5	時間	3	4.5
9 (良い、嬉しい)友人	2	3.0	人		
10 最高	2	3.0	価値	2	3.0
11 全国各地	1	1.5	広がり	1	1.5
12 キャラ	1	1.5	人		
13 支えてくれる人	1	1.5	人		



A学部に入学してよかった理由についての自由記述をテキストマイニングの手法により分析し、カテゴリーを形成した結果が表9である。抽出されたカテゴリーを再整理し、集約したものが表9中の「カテゴリー修正」である。これをみると、A学部の学生は「人」「活動」「関係」のカテゴリーで、満足度が高くなっている。

## 2. 考察

A学部の学生の自己肯定感の傾向と生活の現況をまとめると、次のようになる。

1) SOSEとBASEのバランスがよく形成され、安定したタイプであるSBタイプは、どの学年でも他のタイプより多い割合であった。学年間による差異は、3年生と4年生の間で認められた。A学部の学生は、このタイプ・パターンからみると「問題がない学生」のように考えられる。質問項目の詳細からみると「豊かな自然環境の中で健康に伸び伸びと素直に育ち、自分のできることを認め、自分自身のことを『これでよい』と思う」認識が根付いている。このタイプの学生が多く存在しているということは、大学生活の中で多少過酷な体験をしても立ち直る回復力(=レジリエンス)を学生たちが有していると理解できるだろう。

しかしながら、3年生と比較して4年生に関してはSBがやや低く、Sbが高い。近藤(2014)<sup>24)</sup>によれば、Sbタイプは「要注意」とされるタイプである。一見、手間がかからず何事にも熱心に取り組み、心配がない学生に見えるが、SOSEが否定されたり、怒られたり、失敗したりしたときなどに傷つきやすく、不安定になりやすい。我々教職員や親の前で見せる、学生の表面的な部分だけで彼ら／彼女らを捉えようと、支援者側が安心してしまい、必要となる支援の提供が遅れてしまう可能性がある。4年生という時期は、学生生活の中でも就職・卒業研究・国家試験対策など社会人としての登竜門が多い。学生の不安や感情の不安定さ・孤独感を理解し、危ういサインを見落とさないようにする必要がある。

2) 学生生活における総体並びに学年間の差として、次のような傾向が認められた。

①学習面・・・高校生の時よりも総体的に学習時間の確保が拡大しているとは言いがたく、自己学習など能動的な学習についてはあまり関心がないと考えられる。調査実施時期には、資格取得のための本格的な取り組みがまだ始まっていないため、学習時間の増加につながっていない可能性も否定できなかった。学生とゼミ教員との距離(気楽に話せるか)については、各学年で有意な差が認められた。ゼミ教員との距離・関係が学習面に与える影響が仮定できるとすれば、今後、「自らゼミを選択する」ことによる効果を測定していく必要があるだろう。

②生活面・・・夢中能れることや授業外の楽しみを見つけることができ、アルバイトも行い、充実した学

生生活を過ごしていることが伺われる。SBタイプの学生が多いことは、このような背景も一因していると考えられる。人間関係、特に友達関係に広がり認められた。

③社会面・・・社会活動やボランティア活動などに参加している学生は少ない。とくに1年生と4年生の差は大きい。荒井(2016)<sup>25)</sup>は「ボランティア活動への参加志向動機を高めるには、自己実現イメージの醸成と否定イメージの低減や親和援助・具体的活動の肯定的イメージの形成を図ることが効果的である」としている。大学での活動が、良質な体験の積み重ねとなり、そうした成功体験が参加意欲の向上につながる仕組みや仕掛けが必要なのではないかと考えられる。とくに多重比較の結果が示しているように2年生時と4年生時の差が大きい。2年生時における明確な方向付けがその後の学生生活に影響するのではないだろうか。

これらを踏まえて、A学部の学生の自己肯定感や生活体験の現状を活かした大学での学びの方向を考察すると、SBタイプの学生が多いという特性を活かし、A学部における学習面や社会活動への参画の動機付けや継続の必要性、さらにはより高所を目標とする意欲を引き出すような教育的配慮が必要であると考えられる。一方で、「要注意」とされるSbタイプも多い。学生本人は「自分が好き」で「これでよい」と思っているのだが、日々の教育の中での実感として、社会的な広がりや深まりに欠ける傾向があるようにも感じられる。学生の中に一定割合の発達障害、あるいはその疑いのある学生がいることも事実であり、そうした視点からの教員による学生への関わりも必要なことだと考えられる。

## VI. おわりに

今回の調査を終えて筆者らは、A学部の学生たちがSOSEもBASEも高い群と、その逆に低い群に二分されていることを発見した。後者にあたる自己肯定感が「低い」群に属する学生は、自分を謙虚に表現する方がよいとする国民性が反映されているという見方もできる。が、その特徴が人間関係づくりの場面で、消極的な意味で現れ、失敗経験を積み上げてしまうことにもなりかねない。失敗を恐れて、自分が持っている能力を活かすことができない、いわゆる「一歩踏み出す力」が低く押しとどめられている学生もいると、本調査の結果は警笛を鳴らしていると感じられた。今後も大学教育の中で、ますます多様化する学生を、如何に受け止め、有効な教育的配慮をなしていくのか、教員集団に課せられた検討課題は重い。これ乗り越えていくこと、その手法を構築していくことが今後の課題である。

## 引用及び参考文献

- 1) 内閣府 (2014) 『平成26年版子ども・若者白書』
- 2) 国立青少年教育振興機構 (2017) 「特集 子供たちの自己肯定感をどうはぐくむのか」『青少年研究センター紀要』5, pp1-19
- 3) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 (2012) 「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」
- 4) 中原淳, 溝上慎一 (2014) 『活躍する組織人の探究 大学から企業へのトランジション』東京大学出版会
- 5) 全国大学生生活協同組合連合 (2015) 「2014年大学生の意識調査」概要報告 (<http://www.univcoop.or.jp/press/mind/report-mind2014.html>) 2017.8.20検索
- 6) 保田江美, 溝上慎一 (2014) 「初期キャリア以降の探究「大学時代のキャリアの見通し」と「企業におけるキャリアパフォーマンス」を中心に」中原淳, 溝上慎一編『活躍する組織人の探究—大学から企業へのトランジション』東京大学出版会, pp139-173
- 7) 杉浦岳志, 櫻井龍一, 杉浦大暉, 藤田駿介 (2016) 「大学での学びと社会のつながりに関する考察」『キャリア教育学研究』1, pp55-75
- 8) 館野泰一, 中原淳, 木村充, 保田江美 (2016) 「大学での学び・生活が就職後のプロアクティブ行動に与える影響」『日本教育工学会論文誌』40(1), pp1-11
- 9) 河野志穂 (2011) 「文系大学生のインターンシップが大学での学びに与える効果—早稲田大学を事例として—」『日本インターンシップ学会誌』14, pp9-15
- 10) 樋口善之, 松浦賢長 (2003) 「大学生における自己肯定感と生活習慣との関連に関する研究」『福岡県立大学看護学部紀要』1, pp65-70
- 11) 中央教育審議会 (2007) 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」
- 12) 東京都教職員研修センター (2009) 「自尊感情や自己肯定感に関する研究—幼児・児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高める指導の在り方—」『東京都教職員研修センター紀要』8, pp3-26
- 13) 河越麻佑, 岡田みゆき (2014) 「大学生の自己肯定感とその要因」『一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集』66, p197
- 14) 平石賢二 (1990) 「青年期における自己意識の発達に関する研究 (I) —自己肯定性次元と自己安定性次元の検討—」『名古屋大学紀要 (教育心理)』37, pp217-234
- 15) 石丸加奈子, 荒木紀幸 (2005) 「学校生活における自尊感情と学校内不安に関する研究: 兵庫県公立K小学校児童について」『日本教育心理学会総会発表論文集』47, p223
- 16) 青戸泰子, 村瀬まき (2013) 「定時制高校生の自己肯定感を高める要因に関する一研究」『岐阜女子大学紀要』42, pp41-54
- 17) 吉森丹衣子 (2016) 「大学生の自己肯定感における対人関係の影響: コミュニケーションを重視して」『国際コミュニケーション学会誌』21(1), pp179-188
- 18) 日景弥生 (2012) 「小・中・大学生を対象とした被服製作用語と調理用語の知識や技能の実態: —青森と東京の実態比較—」『日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集』55, p64
- 19) 荒谷容子 (2013) 「女子大学生への回想法の試み(1) 自己肯定感に着目して」『児童教育研究』22, pp67-70
- 20) 宮嶋淳 (2008) 「社会福祉系学生の生活体験・学習活動・生活に関する一考察」『中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要』9, pp89-98
- 21) 近藤卓 (2013) 『子どもの自尊感情をどう育てるか そばセット (SOBA-SET) で自尊感情を測る』ほんの森出版
- 22) 高儀郁美, 山本澄子, 矢野芳美他 (2015) 「看護系大学生における自尊感情の実態: SOBA SET を用いて」『北海道文教大学研究紀要』39, pp31-37
- 23) 石村貞夫・石村光資郎 (2015) 『SPSSによる分散分析と多重比較の手法第5版』東京図書
- 24) 近藤卓 (2014) 『基本的自尊感情を育てるいのちの教育—共有体験を軸にした理論と実践』金子書房
- 25) 荒井俊行 (2016) 「大学生のボランティア活動へのイメージが参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響」『日本教育工学会論文誌』40(2), pp85-94

